

ギベルティの「コンメンタリオ第二書」について

研究ノートⅡ「第二書」の評価の歴史（ヴァザーリから19世紀まで）

上 田 恒 夫

Appunti per uno studio sul Secondo Commentario del Ghiberti

II Fortuna del Secondo Commentario attraverso i secoli
(dal Vasari fino all' Ottocento)

Tsuneo Ueda

序

前号の小論で私は、ロレンツォ・ギベルティの著作「コンメンタリオ第二書」（1450年頃に成立。以下「第二書」と略記）のジョット批評を取り上げ、そこに用いられたいくつかの用語を手短かに分析した。すなわち、doctrina（芸術の教義、理論）とその形容詞docto（芸術理論に通暁した、博識の）、misura（主に人体比例を指す）、形容詞perito（熟達した）、genere（ジャンル）などがそれである。これらの言葉には、人文主義文化の響きが強く感じられる。例えば「第二書」の美術批評の中で最も重要な働きをするdoctrina, docto という用語に出会う時、ある異和感を覚えるのはそのためかも知れない。この言葉は、元来人文主義者が好んだ、フィレンツェの文化のある知的傾向を読者に喚起させはするが、必ずしも美術批評固有の用語ではなかったのである。その言葉の意味を限定して、美術批評の用語としたのはギベルティの独創である。1300年代最大の人文主義者ペトラルカとギベルティの批評態度を比べてみればそれは容易に理解できよう。ペトラルカはその遺言状の中で次のように書いている（一部簡略化）。《友人が私に贈ってくれたジョットの聖母図は

教養のない人には理解できないが、芸術家はそれを見て驚嘆する。》（R.Salvini, Giotto-Bibliografia, 1938, 1971, p.5による）教養ある観賞者の感性に響きあうジョットの芸術の知的傾向がまことに鋭く把握された批評である。同じペトラルカは中世「暗黒時代」の外面を飾る工芸的な美を批難して、それに代る知性と精神の高貴を追求した人でもあった。（De Remediis utrisque fortunae, Dassaminiato 訳, Cap.XLI）精神の高貴の探求が、つきつめれば目をあざむく絵画の虚構に対する倫理的批難（Ibid., Cap.XL）に行き着かざるを得なかったのはしかるべき結果ではあっただろう。しかし、それは倫理的な批難の枠を超えているわけではなかった。それゆえ、知性と精神の文化の再興を夢想したペトラルカが、友人シモーネ・マルティエーニの線に託した高貴な精神と同時に、人文主義者の知性に訴えかけるジョットの写実も、特別の矛盾なしに受け入れることができたのだった。

これと比べると1400年代の彫刻家ギベルティの芸術家批評はほとんど例外なく直接の観照体験にもとづいている。ギベルティには、シモーネとジョットを同列に置いて批評することは許されないことに感じられた。それは2人の画家

が全く異質の造形精神の持主だからという理由からだけではない。「第二書」を読むと、ジョットとシモーネには優劣の判断がはっきり下されていることがよく分るのである。

《シモーネは極めて高貴な画家であり、大変高名であった。シエナの画家たちは彼が第一等だったと見なしているが、私はアンブロジオ・ロレンツェッティの方がはるかに上か、さもなくば他の誰よりも博識だった(dotto)と思う。》(Ghiberti-Schlosser, Comm. II, 13)

これはシエナ派批評の部分である。重要なのは、フィレンツェ滞在が知られまたジョットの造形の骨格をよく学んだA.ロレンツェッティが、docto (dotto) と評されていることである。シモーネにはこの形容詞が欠落しているのである。つまり、doctrina, docto という言葉は、ジョットに代表される理論的造形秩序を肯定する批評用語ではないかと思われる。形容詞doctoはこのように明快な価値判断を含んだ用語なのである。

ギベルティが自分の批評用語に与えた独自の意味づけは、古代文献と比較すると一層明瞭になるであろう。

「コンメンタリオ第一書」(以下「第一書」と略記)の古代美術史執筆に当って、ギベルティは古代ローマのウィトルーウィウスやプリーニウスらの著作を研究し、そこからdoctrinaをはじめとする多くの語いを借用したのだった。しかし、古代の著述家とギベルティとでは用語の意味づけは全くと言っていいほど異なるのである。この点を鋭く指摘したG.シニバルディの文章を引用しよう(要約)。

《ギベルティはl'arte naturale, gentilezza, misuraといった概念をプリーニウスから学んだとはいえ、それらを自家薬籠中のものとしている。彼がプリーニウスの著作を翻訳して、そこに1400年代の感情を通わせる時、同じ自然主義讃美の言葉でも、意味は全く変わってしまう。プリーニウスはそれらの言葉を用いて、パラシオスやポリュグノトスの自然主義的技能を讃えるだけである。しかるにギベルティは、ジョットのあれこれの技能には触れず、むしろ精神的な

意味をそれらの言葉に与えている。》(G. Sinibaldi, Come L. Ghiberti sentisse Giotto e A. Lorenzetti, in "L'Arte," 1928)

ギベルティは無批判に古代文献を翻訳したり、用語を借用したりしたのではなかった。1つ1つの用語には、なんらかの著者の価値判断が加えられているのである。

このようにみえてくると、「コンメンタリイ」、特にその「第二書」を、無批判に美術史研究のための情報源として、あるいはギベルティの彫刻の作品目録として理解し活用するだけでは片手落ちであることが理解されよう。docto という形容詞に最もよく表われたギベルティ独自の芸術観の再構成が必要だと思うのである。それは「第二書」を芸術批評の書として取り扱うことである。その作業を経てのち、「第二書」を改めて美術史研究の情報源として読む時、意外な解釈も可能になるのではないだろうか。その具体的な事例の呈示をこの研究ノートの結論に予期しつつ、当面は前号に引き続いてギベルティの美術批評用語を取り上げ、今一步踏み込んだ分析を試みてみたいと思っている。

ところが、「コンメンタリイ」の研究史を概観してみると、予想に反してギベルティの用語研究が遅れているのに驚かされる。一例を挙げれば、近年最も正確な「第二書」の英訳を試みたJ.ハードのdoctrinaの解釈でさえ、ギベルティがベースにしたウィトルーウィウスの用例に即して分析しているかのような印象を与える。(J.L.Hurd, L.Ghiberti's treatise on sculpture: the Second Commentary, Bryn Mawr College, 1970, p.25, n.50 参照) ギベルティのテキストに即した独自の意味の論議は十分尽されていないというのが現状であろう。

用語研究の遅れは、「コンメンタリイ」の全体を見通した評価の遅れと歩調を合わせて来たように私には思える。そこで用語研究に入る前に、今回はまず「コンメンタリイ」研究史を振り返ってみることにしたい。

本 論

「コンメンタリイ」研究史とは、この著作に

対する評価の歴史にほかならない。そして、この著作に対する浮沈の激しかった評価の歴史が、彫刻家としてのギベルティに対する評価と相互に絡みあいながら形成されてきたことは指摘するまでもない。その事実を認めつつ、ここでは簡潔を期して「コンメンタリイ」そのものの評価の歴史に的を絞りたい。

1

その歴史は16世紀のG.ヴァザーリから始まる。ヴァザーリは、「美術家列伝」で次のように書いている。

《このロレンツォは俗語で一冊の本を書いて、その中でいろんなことを論じているが、そこから役に立つことを引き出すことはほとんどできない。私の考えでは、ただ一つ優れたところがある。それは、彼が多くの古代の画家、特にプリーニウスの引用している画家たちについて論じた（筆者注「第一書」）後、チマブーエ、ジョット、その他当時の多くの人々に関して簡単に記述している（筆者注「第二書」前半）点である。そして、これらの人々について、彼がもっと詳しく論ずべきところをごく簡単にしか述べていないのは、首尾よく彼自身に関する記述にすみやかに到達し、また彼自身のすべての作品を一つずつ細かに語ろうとする（筆者注「第二書」後半）ためにほかならない。見過すことのできないのは、彼はこの本が他の人によって書かれたように装っているが、後の方で記述が進むにつれ（中略）彼自身を語るに当って、「私は製作した」、「私は言った」（中略）などと第一人称で述べていることである。》（G.Vasari, *Le Vite*, 1^aed. 1550, 2^aed. 1568, ed. G. Milanesi, Firenze 1906 tomo II, p.247）

ヴァザーリの批評——と言うよりむしろ批難の論評——には、もっともと感じられるところがある。ギベルティの自己本位の執筆態度を、強い口調で批判する部分はなるほどと思わせる。ルネサンスの芸術論の書が当然備えるべき客観的な記述の態度が、「コンメンタリイ」には欠けるとヴァザーリは言いたかったのであろう。ヴァザーリはアルベルティの「絵画論」やレオナ

ルド・ダ・ヴィンチの「絵画論」を当然知っていたし、本人もマニエリスム期の芸術論の大成者の一人だった。ギベルティが「第一書」で自己流に翻訳して見せたプリーニウスの「博物誌」とウィトルーウィウスの「建築書」の俗語訳は、それぞれ、C.ランディーノとC.チェザリアーノによって、1473年と1521年に出版されている。活字印刷によって広く流布したこれらの俗語訳はヴァザーリの手許にも届いていたに違いない。ヴァザーリの眼にギベルティの文章が不備に見えたにしても、そのことでヴァザーリを批判する気になれないのは、そうした歴史的背景があるからであろう。

むしろ我々は、ヴァザーリがいろいろ欠点を並べながらも、「第二書」前半の1300年代美術史の叙述（以下1300年代美術史論という）を特に取り上げて、《優れたところがある》と言って高く買っている点に注目したい。このことを逆に言えば、「第一書」についてヴァザーリは数語を費すだけで何の論評もせず、「第三書」に至っては完全に沈黙しているということである。つまり、ヴァザーリには、「コンメンタリイ」3書全体を把握した視点に欠けるのである。これはヴァザーリの論評の限界を示すというよりも、彼の見識をあらわすものと考えたい。「コンメンタリイ」3書全体を貫くギベルティの人文主義的構想（これを全面的に明らかにしたのはシュロツサーである。次号参照）から判断すれば、ギベルティの著述の最終目的が、人体比例論、解剖学、光学など彫刻家に必要な基礎学科としての芸術理論を述べた「第三書」の執筆にあったことは明らかであろう。しかし、ヴァザーリは、古代・中世の自然科学書の寄せ集めの観を呈するこの「第三書」をあえて顧みることなく、ただ「第二書」の優れた美術批評だけに注目したのである。これは十分強調されてよいことだと思う。なぜなら、「第二書」の1300年代美術史論だけを拾い上げてその他は捨てるというヴァザーリの批評態度は、少なくとも、C.フライ、W.カラブラの19世紀から20世紀初めにかけての優れた文献学者のそれと基本的に同じだからである。これに関連して付け加えれば、「第二書」

前半の1300年代美術史論のどこを具体的にヴァザーリが評価したのかについては、詳しく知ることができない。しかし、「美術家列伝」執筆に当ってヴァザーリがギベルティの記述を信頼に足る資料として使っていることは事実なのである。(W.Kallab, Vasaristudien, Wien-Leipzig 1908, Ss. 151ff. 以来、多くの学者がこれを立証している。) それから推察するならば、自らも広くイタリア各地に美術品をたずね著作のための材料を渉猟したヴァザーリが、改めてギベルティの批評の的確さを確認することになったと考えていいと思うのである。

さて、ヴァザーリにつづくそれ以後のおよそ3世紀の間、「コンメンタリイ」の研究にはなら見るべきものはなく、空白同様になっている。それは当時のヨーロッパ文化に強大な影響力をもった美術アカデミー及び古典主義的思潮と無関係ではなかっただろう。「第二書」の自己本位の簡略すぎる記述、あるいは著者の意に反して人文主義的芸術論の書としてはさまざまな弱点を露呈することになった「第一書」と「第三書」の論述が、イデア論を軸に精緻に組み立てられていったこの時代の古典主義的芸術論と相いれなかったのではないだろうか。ヴァザーリの評価の消極的部分だけが助長され、定着していき、「コンメンタリイ」の存在そのものが疑われ埋もれていった時代だったと言えよう。

2

本格的な「コンメンタリイ」研究の開始は、近代に入ってからのことである。しかもそれが、「第二書」のテキストの刊行から始まったのは特徴的である。J.フォン・シュロッサーの, Lorenzo Ghibertis Denkwürdigkeiten, Berlin 1912, 2^{er}Bd., S.8 が初期のテキスト刊行の動きを報告しているので、ここではL.チコニャーラの著作を挙げるにとどめたい。L.Cicognara, Storia della Scultura, Prato 1823, tomoIV, pp.208 ff. (冒頭部分を除く「第二書」のテキストを収録) ここでも、全3書のうちまずヴァザーリの場合のように「第二書」が注目され、そのテキストが最初に公にされたことは、興味

深い事実である。しかし、チコニャーラが「第二書」を取り上げた視点は、ヴァザーリのそれとは微妙にずれている。チコニャーラは、まず第一にギベルティの彫刻研究のための基礎資料として「第二書」のテキストを我々に提供しているのである。この傾向をもっと鮮明に打ち出したのは、「第二書」の全文と「第三書」の一部分のフランス語訳を付録に加えたCh.パーキンスの研究である。(Ch.Perkins, Ghiberti et son école, Paris, 1886) 彼は《ギベルティの著作に対する興味は、それ固有の価値というよりもむしろ著者の芸術上の名声に起因している》と割り切り、「第一書」については、プリーニウスの著述にもとづいたとりとめもない要約であるとしている (ibid., p.99)。パーキンスは、自分が行なったギベルティの彫刻に関する研究の必要に引きずられ、そこから「コンメンタリイ」を見ているのである。彼が「第一書」の仏訳を断念し「第三書」の仏訳は、ギベルティが実際に見聞した古代彫刻、宝玉類の記述の部分に限っている事にも、パーキンスの考えがよく示されている。

パーキンスの批評は、大きな問題をはらんでいた。人文主義的芸術論としては難点の少ない「第一書」と「第三書」を実質上無価値とし、「第二書」だけを取り上げるというのは、ヴァザーリの場合と同じにみえる。しかし、「第二書」の取り上げ方が両者では異なるのである。ヴァザーリが共鳴した部分は、「第二書」後半の自伝の部分ではなくて、前半の1300年代美術史記述の部分であった。この部分は、ギベルティの確信に満ちた芸術批評を聞くことができる部分だったからに違いない。パーキンスは、ヴァザーリとは反対に、「第二書」の後半を取り上げた。ギベルティの自伝の資料的価値を重視し、「コンメンタリイ」の《固有の価値》に眼をつむってしまったのである。言い換えるならば、パーキンスは「第三書」の芸術理論は言うに及ばず、「第二書」前半の1300年代美術史論に対しても消極的な態度で臨んだわけである。約3世紀にわたって「コンメンタリイ」の存在そのものがほとんど忘れ去られていたあとだっただ

けに、ヴァザーリ以来、自己本位で《簡略》すぎると批難されてきた1300年代美術史論の再検討はひとまず括弧に入れられ、「第二書」のうちでもギベルティ自身の彫刻の情報源として最も確実に見えた後半の自伝の部分に、当面の焦点が絞られた、とこの間の事情を説明することもできそうである。パーキンスにすれば、この自伝はギベルティ本人が綴った自作彫刻作品の目録にほかならず、《一人称で》叙述されているがゆえに絶対的価値があるとされた。こうして彼は、「第二書」の自伝の部分を「コンメンタリイ」の他の部分から切り離し、それ自体でギベルティの彫刻研究のための根本資料としての価値を認めることになった。

ところで、「第二書」の自伝の部分が絶対的な資料的価値をもつという事実は、誰もが認めざるをえないだろう。では、同じような資料的価値が、自伝の前に置かれた1300年代美術史論になぜ認められてはいけないのか。1300年代美術史論は、かつてヴァザーリが高く買った部分ではなかったか。パーキンスの見解からの発展としてこの問題を考えてみよう。

まず、パーキンスは、彼のギベルティ研究の中で何度もヴァザーリを引用しているのであるから、ヴァザーリが少なくともギベルティの1300年代美術史論を評価していたことを知っていたはずである。とすれば、なぜパーキンスはヴァザーリの評価に興味を示さなかったのかという疑問が生ずる。1400年代のギベルティの彫刻を研究するパーキンスにとって、1300年代の、しかもほとんど画家だけに絞ったギベルティのテキストは無用だったという現実的な理由も考えられよう。しかしそうではなく、1300年代美術史論が単なる歴史の客観的事実の記録というよりも、むしろ美術批評だという点にその理由があったと私は考えたい。すでに見たように、パーキンスからすれば、「第二書」後半のギベルティの自伝が提供する情報は、美術作品に記された署名や日付けと同等に、過去に起った事実そのものと見なすことができる。しかし、ギベルティの主観的判断にもとづいて綴られた1300年代美術史論は、ギベルティの芸術観を知る材

料とはなるが、客観的資料にはなりえない——ここに、ギベルティの彫刻に関する客観的事実だけを求めたパーキンスが、1300年代美術史論の記述に関心を示さず、またヴァザーリの評価を顧みなかった本当の理由があったのではないだろうか。つまり、パーキンスは1300年代美術史論がギベルティの主観的な美術批評であるがゆえに、その評価を保留したのではないかと思われるのである。だとすると、パーキンスは1300年代美術史論がギベルティの独自の美術批評であることは認めていたと結論してもよさそうである。

パーキンスの認識は極めて重要である。というのは、「第二書」後半のギベルティの自伝に認められたのと同様に、1300年代美術史論にも美術史研究に供すべきなんらかの資料的価値を認めようとするならば、まずそれを美術批評として考察せざるをえないという新しい展望がそこから開かれるからである。美術批評として考察するということは、ギベルティがジョットをはじめとする1300年代の芸術家の作品をどう判断したかの分析であり、またギベルティの芸術観の再構成をも意味するであろう。もっとも、ギベルティの1300年代美術史論を高く評価したヴァザーリにしても、先に引用した彼の「ギベルティ伝」を読む限り、ギベルティの批評を具体的に分析してくれたわけではなかった。むしろそこでは多才な芸術家であり伝記作家であったヴァザーリの優れた直観を垣間見る思いがするのである。

3

ヴァザーリの評価を再発掘し、さらに進んで「第二書」を美術批評の書として取り上げたのは、美術史文献 *Kunsthistoriographie* の分野における研究であった。そしてこの分野が、19世紀以後の「コンメンタリイ」再評価の新しい局面を形づくることになった。その代表的な学者は、ドイツのC.フライとW.カラブである。C. Frey, *Il Codice Magliabechiano*, Berlin 1892 (Gregg-reprint 1969). XXXVII-XLVI ; W.Kallab, *Vasaristudien*, Wien-Leipzig'1908

Ss. 151–157 (J. フォン・シュロッサーも本来ならここに一括して紹介すべきであるが、いくつかの理由により、後に別個に論ずる。)

まず、上記の研究タイトルにもうかがわれるように、フライとカラブは、ギベルティの著作そのものをテーマにしたわけではなかったことに注意しておきたい。しかし、そのことは「コンメンタリイ」再評価の点からしても、かえって大きな収穫をもたらすことになったようである。というのは、フライが論じた美術家伝「マリアベッキ手稿」Codice Magliabechiano とカラブの論じたヴァザーリの「美術家列伝」のテキストが、各々、ギベルティの「第二書」のテキストと比較照合され、ギベルティの1300年代美術史論の記述が前二書よりも優れていることが明らかになったからである。

以下に「第二書」の1300年代美術史論における、美術批評と記述された情報の精度の問題に照らして、フライの研究を紹介することにし、カラブの研究については省略したい。フライの研究に限るのは、それが次号で取り上げるシュロッサーの研究に決定的影響を与えているからでもある。

フライが選んだ「マリアベッキ手稿」とは、無名のフィレンツェ市民によって1539年から1547年にかけて書きためられたと推定される美術家伝草稿（フィレンツェ国立図書館所蔵）であって、その主な部分は、チマブーエからミケランジェロに至るフィレンツェの芸術家とその作品についての記述からなっている。そしてフライの主たる研究課題は、この手稿の原典批判Textkritik にあった。その紹介のまえに、あらかじめドイツの美術史文献学者の原典批判の方法について触れておきたい。

L.ヴェントゥーリによれば、それは次のようである。

《この（筆者注、文献学の、つまり美術史文献学の）方法というのは、原資料の検討とその分析からなっている。つまり、1つの証言を受け入れる前に、それはいかなる情報にもとづいたものであるかを決定せんとし、次いでそれはさらにそのもとの原資料にまで分解される。この

原資料についての外面的な過程が遂行されると、今度は内面的な過程に移る。つまり、この証言の著者が、果して真実を語っているかどうか、あるいはそれを曲げたり、でっち上げたりしていないかどうか、いるとすればそれはどの程度にであるか、といったことを決定せんとする。》（「美術批評史」、辻茂訳、みすず書房版1971年、208ページ）

ここに見られるように、原典批判というのは、文献のテキストをありのままに分析し、そのテキスト独自の主張を確定しようとする方法である。そしてそのテキストが美術批評の書であれば、その批評が著者本人の判断に基づいたものであるかどうかを検討し、本人の考えを表わすものであれば果してその批評が客観的な妥当性をもつかどうかを必要ならば作品の实地検分によって判断しようとする。だとすれば、原典批判は、文献の美術批評的価値の検討を最初から前提とした方法だと言っていると思う。

さて、フライの研究の紹介に入ろう。フライはまず、「マリアベッキ手稿」以前に書かれたフィレンツェの芸術家伝の系譜をさかのぼり、その中にこの手稿の著者が典拠とした記述があるかどうかをたずねた。フライが検討したフィレンツェの芸術家伝とは、ダンテ、F.ヴィッラーニ、L.ギベルティ、C.ランディーノ、P.ガウリクス、「ピッリの書」、G.ジェッリ、P.ジョーヴィオといった人たちの書いた著作である。次にフライは、それらのテキストと「マリアベッキ手稿」のそれとの比較を試み、「手稿」の著者独自の主張と、他の文献からの単なる引き写しの部分との弁別を試みた。フライがここから得た結論のうち、「第二書」と関係する部分に限って要約すれば次のようになろう。

a. 「マリアベッキ手稿」のうちで1300年代美術及び1400年代美術の一部に関する記述は、ギベルティの「第二書」と「ピッリの書」（筆者注、1516年から1530年にかけて成立したフィレンツェの美術家伝）にもとづいている。（ibid., XCIV; pp. 197ff.）

b. しかし「マリアベッキ手稿」の著者は、自分が典拠にした原典の記述が果して信頼しうるか

どうかを確認するため、記述に取り上げられた作品を実地検分するというをほとんどしていないようである。従って、この著者は美術にうとい一介のしろうとであって、美術品に対する彼自身の判断といったことは彼の念頭にはなかった。(ibid., LXXXVIII)

フライの結論から次の事実を引き出すことができよう。すなわち、「マリアベッキ手稿」の著者は、2つの理由から、自著の記述の信頼性を傷つけることになった。1つは彼自身に作品批評の体験と能力がなかったことであり、もう1つは、「第二書」(あるいは「ビッリの書」)の記述、特に作家判定に関する情報を、文字に書かれているがゆえにゆるぎない事実として鵜呑みにし、ギベルティの作品判断、批評とその当否を理解できなかったことである。(第2の点については、本学報第26号の小論, p.30, 註14でその具体的事例を示した。)この2つは結局は同じことを言っているのである。いずれにせよ、この手稿の著者は、1300年代美術だけに限っても、ギベルティよりはるかに多くの作品をリストアップしているのにもかかわらず、その作家判定にはしばしば疑問がさしはさまれるのである。(その具体例について今挙げることができない。他日これを試みたい。)著者独自の判断、批評の欠如が、いかに記述の信用を傷つけることになるか、この場合からよくうかがえよう。

では、フライが「第二書」の1300年代美術史論を「マリアベッキ手稿」と照らし合わせて考察した結論はどうであろうか。彼はまずギベルティ以前の美術家伝の著述、とくにF.ヴィッラーニの「フィレンツェ市の起源及び市の名士について」*de origine civitatis florentiae et de eiusdem famosis civibus* (1404~5年成立。本書については、本学報第26号の小論, p.30, 註14で触れた)を比較検討して、ギベルティが参照すべき美術批評書が存在しなかったことを結論した。であるとすれば、残されたのは、作品を前にしたギベルティの判断と批評の妥当性の検討だけであろう。最後に、その部分を含めたフライの結論を聞こう。

《どこにおいてもギベルティは自分自身の判

断をたずさえてあらわれる。(例えばシモーネ・マルティーニとA.ロレンツェッティに対する判断, (注)フライ) しかもその判断は常に冷静で思慮深く、卓越している。…彼の見解は諸事実、つまり美術品そのものにもとづいて、形成されたものである。…ギベルティの後継者たちがたっぷり聞かせてくれる逸話とか小話の要素は彼には見られない。したがって私の考えによれば、「コンメンタリイ」の大部分は、彼が長年書きとどめてきたメモ帳にもとづいて、独自に編まれたものである。ギベルティが、他では日常的に行なわれていたように、ただ文字に書かれた手本を写しただけであったとは私には思えない。》(ibid., XLIV-XLV)

フライの結論に説明は要しないであろう。「コンメンタリイ」が執筆されてから4世紀以上を経てはじめて、「第二書」の1300年代美術史論に高い評価が与えられることになったのである。同時に、フライの結論から我々は、美術史文献における美術批評と記述の精度の問題に対する解答を引き出すことができる。それは、作品に下された判断と批評が的確であればあるほど、作品に関する記述はより客観的妥当性を獲得するという事実である。従って、「第二書」の1300年代美術史論は優れた美術批評であるがゆえに、作家判定のための信頼しうる情報源としての価値を発揮できるとも言えるのである。

こうして、近代における「コンメンタリイ」評価の光は、まず最初その「第二書」に当てられたのであるが、フライの視点が常に「コンメンタリイ」を構成する3書全体を包括していたことを忘れずに付け加えておきたい。(ibid., XLI~XLII参照) 次号で取り上げるJ.フォン・シュロッサーの画期的な研究(J. von Schlosser, *Lorenzo Ghibertis Denkwürdigkeiten*, Berlin 1912)も、3書全体を見通す地平から、新たな評価を形づくってゆくのである。

要約と展望

ヴァザーリから19世紀までの「コンメンタリ

イ」評価の歴史はおよそ以上のようなものであった。この歴史的概観は次号で引き続き取り上げる予定であるが、ここで一応今回の研究ノートの要約を示すとともに今後の展望にも触れてみたい。

「第二書」の美術史文献としての取り扱われ方を振り返ってみると、その後半については、歴史的事実を知るための資料として読まれ、文献の美術批評的価値の分析は、最初から求められていなかった。また、前半の1300年代美術史論は、主観的美術批評であるからその記述の客観性に問題があると判断されて、その資料的価値が顧みられない事例があった。

しかし、美術史文献の美術批評的価値と、記述の精度、客観性とは相矛盾するものではないことが明らかになった。ギベルティの1300年代美術史論が、作品そのものに即したすぐれた美術批評書であることはまぎれもない事実である。そして、ギベルティが作品に下した判断、批評がすぐれているがゆえに、作品のアトリビューション（作者判定）の信頼度も高いのである。単純ではあるが極めて重要なこの事実を指摘したのが、ドイツの美術史文献学者であった。「第二書」のすぐれた批評的価値を認め、それを美術批評として検討したがゆえに、その記述がとりわけ1300年代作品の作者判定のための最も権

威ある情報であることを立証したのであった。

これにつづく20世紀の諸研究は、彼らの到達した点から出発して、一層精密にギベルティの芸術批評を分析し、さらにすすんで彼の芸術観の再構成に向った。これによって、「第二書」の記述の信頼性は一段とゆるぎないものとなったと言えよう。しかし、ギベルティの芸術批評の分析にしても、十分研究し尽されたとは思えない。ギベルティの芸術批評を分析するカギが、いくつかのギベルティ独自の批評用語にあることを示したのはJ.フォン・シュロツサー(ibid.)であった。にもかかわらず、現在に至ってもなお、この用語研究は決して十分な成果を挙げているとは言いがたいのである。それは序にも触れたとおりである。用語研究は、ギベルティの批評を分析するための基礎であろう。とすれば用語研究がさらに進めば、ギベルティの芸術観もさらに一歩正確に知られることになるであろう。そして、それと同時に「第二書」の資料的価値を補強するような、新たな解釈の可能性もそこに期待できると思うのである。

以上のような展望に従って、今回は20世紀における「第二書」の評価の展開をたどり、そこで出されるであろう新たな問題をふまえて、用語研究に入って行きたい。